

「環境」をめぐる言語的「メタ環境」：翻訳語と文法的比喻

Linguistic Meta-Environment of *Kankyo*: A Translated Word and Grammatical Metaphor

長沼美香子

Mikako NAGANUMA

Abstract: This paper aims at an interdisciplinary study on environment by linguistically exploring the meta-environment of *kankyo*, a loanword from ancient Chinese for translating an English word environment into Japanese during the dramatic modernization era of Japan in the late 19th century. The word has grown to become one of the most crucial words in global society for its sustainable development, entailing a wide range of connotation in meaning and also being used without any special attention to the etymology and linguistic features. The purpose of this paper is to unpack the word *kankyo* from a systemic functional linguistic perspective, focusing on the nature of nominalization which is regarded as the most powerful tool of grammatical metaphor. Firstly, I explain the research framework with some essential concepts in systemic functional linguistics, and then historically trace *kankyo*, revealing the process of being rooted in Japanese society. The word *kankyo* has expanded its meaning potential, covering from the macro level of the global environment to the micro level of the virtual reality of invisible environment. I assume the turning point of the social connotation of *kankyo* was impacted by Carson's highly influential book *Silent Spring* (1962) and its translation (1964). With environment and translation as the two keywords in this paper, I seek for clues of possible research areas across disciplines in the Rikkyo University Graduate School of Intercultural Communication.

1. はじめに

environment という英語を翻訳する際に、現在では「環境」として日本語に訳出するのがふつうであろう。この言葉はボーダーレス化が進む国際社会の課題を論ずる際の主要概念のひとつだが、その漢字の字義はボーダーを想起させる。しかし、そのような些細な違和感を覚える前に、ほとんど自動的に *environment* = 「環境」と言葉を置き換えて、もはやその意味を深く考える必要もないほどに、「環境」という言葉は日本語として定着している。または考える余裕もないほどに、現実の複雑な環境問題は日々深刻化しているともいえる。本稿の目的は「環境」という言葉を翻訳語として考察し、言語学の知見から解きほぐすこと（unpacking）で、「環境」への理解をさらに深める一助とすることにある。その手がかりを模索するために、「環境」という言葉をめぐりいわば「メタ環境」を論ずることになる。翻訳語という観点から「環境」を歴史的に遡り、<モノ>として名詞化された文法的比喩（grammatical metaphor）に内在する意味のしかた（how to mean）を糸口に、「環境」を言語学的に再考したいと考えている。したがって、本稿で主として試みようとするのは、環境思想論的な分析ではなく、「環境」という言葉そのものに対する機能言語学的視点からのアプローチである¹。

2. 文法的比喩

(1) メタ機能と層化

ハリデー（M.A.K. Halliday）らを中心とする機能主義的な言語理論である、選択体系機能言語学（Systemic Functional Linguistics: 以下 SFL という）では、コンテキストのもとで意味のしかたが選択されることに注目し、テキストを分析する（Halliday, 1994; Halliday and Matthiessen, 2004; Martin, 1992 など）。言語の体系（system）と個別のテキストとの関係は連続的变化（cline）であり、たとえば特定の気候と個別の天気との関係に類似すると説明される（Halliday and Matthiessen, 2004, p. 27）。言語使用の具体例（instance）であるテキストは意味の単位で、日々の天気のように現象的なバリエーションがみられるが、それらのテキストをタイプごとにまとめれば、ある地域の気候として一般化されるような理論体系が存在する。そして、言語は意味を作り出す資源（meaning-making resources）である。SFL では固有の用語をいくつか用いるが、文法的比喩に関連する重要な概念はメタ機能（metafunction）と層化（stratification）であろう。これらを中心に SFL における言語観を俯瞰しておく。

テキストの意味は3つのメタ機能から分析される。なぜなら、観念構成的 (ideational)・対人的 (interpersonal)・テキスト形成的 (textual) 機能の3つが語彙文法 (lexicogrammar) に具現化 (realization) されて、テキストが意味あるものとなるからだ。換言すれば、「何を」「誰に」「どのように」という点で意味が分析されるのである。また、これらの3つのメタ機能はコンテキストとしての言語使用域 (register) の変数である「活動領域 (field)」「役割関係 (tenor)」「伝達様式 (mode)」にそれぞれ対応する。そして、コンテキストや意味と語彙文法との関係は、層化のイメージで描かれる (図1)。意味層 (semantics) と語彙文法層 (lexicogrammar) は内容層であり、音韻層 (phonology) と音声層 (phonetics) は表現層 (expression) となる。図1で示されているように内容層と表現層はそれぞれ上位の層に包摂されている。内容層を構成する意味層と語彙文法層との関係は、前者が後者によって具現化されるというもので、どちらの層もさらに上層のコンテキストから影響を受ける。

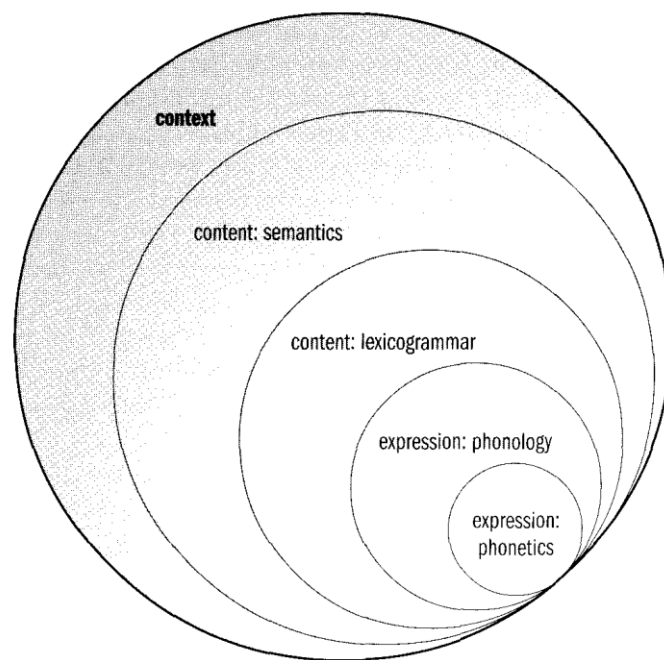


図1: 層化 (stratification) のイメージ (Halliday & Matthiessen, 2004, p. 25)

メタ機能と層化についてももう少し具体的に、次のような例文 i) と ii) で考えてみよう。ともに大学の授業において課題提出の締め切りが過ぎてしまった状況で、遅れた理由を説明する場面の言語使用例だ。

i) I handed my essay in late because my kids got sick.

ii) The reason for the late submission of my essay was the illness of my children.

(Eggins, 1994, p. 57)

上記の例文では何を誰に伝えるのかという点で差異はなく、違いはどのようにという点である。つまり対面して口頭で説明するのか、課題と一緒に事情を記した書面を添えるのか、という違いである。このように音声言語か書記言語かという言語使用域での伝達様式の差異が、実際のテキスト形成的機能における選択を変えて、その影響が語彙文法に具現化されている。“I”か“the reason for the late submission of my essay”かのどちらの主題を選択 (thematic choice) するのは、コンテキストの変数から影響されたメタ機能の具現の結果であるといえる。このような個別の選択の傾向は、さらにテキスト・タイプとしてまとめることもできよう。層化という考え方においては、層と層との間に連携のプロセス (process of linking) を通した関係があり、上層からの影響下で下層において適切な選択がなされるのである。

(2) 文法的比喩と名詞化

文法的比喩は、内容層における意味と語彙文法との間の関係から生じる。一般に比喩とはある関係が一致した (congruent) ものではない場合であり、文法的比喩とは意味と語彙文法が一致しない場合なのである。たとえば、“Close the door.”と“Would you mind closing the door?”という発話では、どちらも「戸を閉める」という行為の要求を意味するが、後者は疑問法 (interrogative mood) が選択されているので、意味と法 (mood) が一致していない。これは対人的機能の文法的比喩 (interpersonal grammatical metaphor) の例である。また、先述の例文 i) では“I handed my essay in late”“my kids got sick”という選択において、過程 (process) を中心に節 (clause) が構成されて、観念構成的に現実の出来事と一致した表現がなされている。他方、例文 ii) では同様の意味内容が、“the late submission of my essay”“the illness of my children”という参与要素 (participant) となる。節で意味されていた出来事を名詞化することで、<モノ>として表現しているのだ。ここでも文法の選択が意味と一致しておらず、比喩的である。これは観念構成的機能の文法的比喩 (ideational grammatical metaphor) の一例だ。

名詞化による文法的比喩は言語の個体発生 (ontogenesis) と系統発生 (phylogenesis) の点からも示唆に富む。名詞化による文法的比喩は、いわば大人の言語使用の特徴であると同時に、近代以降に発達した専門用語に顕著でもある。日本においても明治時代に成立した近代日本語の特色として、西洋文明からの翻訳語には漢語の名詞が多い (森岡, 1991)。われわれを取り巻く現実混沌としてダイナミックなくコト>的な出来事の世界であるが、その現実を名詞として切り取り、<モノ>としてコード化することで、さまざまな近代的知識の集積が可能となったのである²。ハリデー (1994) を引用すれば名詞化は次のように説明できる。

Nominalizing is the single most powerful resource for creating grammatical metaphor. By this device, process (congruently worded as verbs) and properties (congruently worded as adjectives) are reworded metaphorically as nouns; instead of functioning in the clause as Process or Attribute, they functions as Thing in the nominal group. (Halliday, 1994, p. 352)

(3) 文法的比喩の氾濫

近代的知識は名詞化されて、<モノ>として参与要素となり、テキストの展開に寄与する。名詞化された知識を参与要素としてテキストを展開するのは、科学技術や法律などの専門性の高いテキスト・タイプの特徴である。そして、いったん名詞化されるとその名詞は専門分野の進化に追随して、増殖し氾濫していく可能性がある。<コト>という具体的な関係性をあらかず出来事から名詞化された<モノ>においては、抽象的な曖昧性を内包しながら、混沌とした意味の世界が日常の言葉から遊離するのだ。専門的な内容のテキストに名詞化がひしめくのは周知のとおりである³。抽象性が一種の権力を有するのだ。

「環境」という言葉を例にとるならば、こういえるだろう。われわれの身の回りを「取り巻く」ダイナミックで具体的な出来事が「取り巻くこと」「取り巻き」とする中間的な名詞化を経て、「環境」としてさらに一段高く抽象度を上げたのである。この「環境」という言葉の名詞としてのふるまいを思い描くと、生物学由来の専門用語⁴がその意味の裾野を広げ、現代社会を代表するさまざまなキーワードに組みこまれているのは、抽象度の高い言葉がその特質を最大限に生かした結果だともいえる。名詞化という文法的比喩として分析されうる「環境」という言葉について、その歴史的な背景を含め、翻訳語という観点から概観しておこう。

3. 翻訳語としての「環境」をめぐる「メタ環境」

(1) 「環境」という言葉の歴史

『漢字百科大事典』(1996, p. 92)によると、翻訳語としての漢語は次のように分類できる。「西洋文化がすでに中国に移入されており、中国で作られた翻訳語をそのまま借用したもの。日本人が類似の概念をもつ漢語に新しい意味を付加したもの。日本人がまったく新しく造語したもの」の3つである。いずれも西洋語を翻訳する必要から使われた漢語であるという共通点から「翻訳漢語」とされる。

そもそも「環境」という言葉は、上記のどれかに該当するのだろうか。また該当するとすればどれに分類されるのであろうか。この問いへの答えを探しながら、現代の日本で辞書的にどのように定義されているのかを確認するために『日本国語大辞典』[第2版](2001, p. 1246)をひも解いた。

かん-きょう【環境】[名]①四方のさかい。周囲の境界。まわり。 *元史-余闕伝「環境築_堡砦」
②まわりの外界。まわりをとり囲んでいる事物。特に人間や生物をとりまき、それとある関係を持って、直接、間接の影響を与える外界。自然的環境と社会的環境とに大別する。 *パーカー氏統合教授の学理(1900)〈市川源三〉二「故に人類進化の歷程を明らかにせんとならば、其の環境、事情、勢力等の、彼の動作に影響したるものを討究するの必要がある」 *新しい言葉の字引(1918)〈服部嘉香・植原路郎〉「環境 Milieu (仏) 外界又は周囲のこと」 *秋立つまで(1930)〈嘉村礒多〉「互いに枉屈的な環境から解放された母と娘とは」 *学校教育法(1947)七七条「幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」 *自由学校(1950)〈獅子文六〉都会の谷間「第一に、環境が幽邃である。こんなに、樹木が多く」

語誌 漢籍に見える①が原義。②の意は、はじめ「環象」(『哲学字彙』の environment の訳語)あるいは「境遇」(同じく circumstance の訳語)という語で表わしていた。「環境」が一般化したのは大正期。

この説明によれば、「環境」という語はもともと漢籍⁵にあったが、現在われわれが使用する「環境」とはその意味が少し異なっていた。したがって、上述した翻訳漢語の分類では、2番目の「日本人が類似の概念をもつ漢語に新しい意味を付加したもの」に該当する。もっとも、近代の日本では英語の environment を翻訳する際に、はじめは「環境」ではなく「環象」を当てていた。『哲学字彙』の初版は明治14(1881)年、井上哲次郎らに

より編纂されているが、この書物を見ると、幕末から明治前期にかけて西洋から大量に流入した新しい概念にどのような訳語を用いていたかを知ることができる。『哲學字彙』での用語分類としては、「倫理學・心理學・論法・世態學・生物學・數學・物理學・理財學・宗教・法理學・政理學」があり、生物学の専門用語として「環象」という訳語が当てられている⁶。

さらに時代を遡って江戸時代の文久 2 (1862) 年に長崎通詞の堀達之助編で刊行された『英和对訳袖珍辞書』(杉本, 1981) には、*environ-ed-ing* の訳語として「取巻ク」、*environs* の訳語として「近邊」は載っているが、*environment* という項目やその訳語はまだ掲載されていない(図 2)。同辞書は江戸時代の蘭学の成果も踏まえて編纂されたもので、H. Picard 著 *New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages* (1857) を底本としているので、当時は名詞化された *environment* という英語そのものが西洋においてもまだ定着していなかったのではないかと想像できる⁷。

English	Japanese
Entry, s.	入り口
Enucate-ed-ing, v. a.	ニ飾リ付テアル食物
Enucation, s.	解ク
Enumerate-ed-ing, v. a.	算ヘテ
Enumeration, s.	算ヘテ
Eunucate-ed-ing, v. a.	言ヒ出テ解明ス
Eunucation, s.	言ヒ出テ解明ス
Eunucative, adv.	知ラズ解明ス
Envelop-ed-ing, v. a.	巻ク取リ巻ク
Envelope, s.	蓋覆ヒモ
Envelopment, s.	起シ立テ巻ク取リ巻ク
Envenom-ed-ing, v. a.	毒散ル
Envable, adv.	恨可キ
Envier, s.	恨ム人
Envious, adv.	恨ヲカケル倭心深キ
Enviously, adv.	恨ニテ
Environ-ed-ing, v. a.	取巻ク
Environ, s. pl.	近邊

図 2: 『英和对訳袖珍辞書』における 'Environ'

さて、大正 11 (1922) 年に初版が出された『齋藤英和辞典』には *environment* の訳語として「環境」が登場してくるが、もはや「環象」という訳語はなく、次のように記述している。

environ [他動] (a person or place with something) (人や場所を) 取巻く、圍む、周圍に環を成す。-ment

[名] 同上する事。②身邊の事物や、人々、環境。-s [複名] (of Tokyo, etc.) 郊外、みまはり。

生物学用語 *environment* の翻訳語であった「環象」にやがて代わって使われるようになった「環境」という語⁸は、辞書での説明でも明らかなように、身近な周りの状況に対して使用されていたと思われる。たとえば「教育環境」などという使い方であろう。それが「環境教育」という最近の使用例になると、「環境」という言葉のふるまいが少し変化しているのではないだろうか。この差異は微妙であるが無視できない、と筆者は考える。「教育のための環境」から「環境のための教育」へと変わったのである。主体を取り巻く客体という脇役から、「環境」そのものが主体となるために、名詞としての翻訳漢語が果たした役割は見過ごせない。主体を「取り巻く」という具体的な出来事から、抽象度を高めた「環境」という<モノ>となることで、その後「環境」を主体とする専門的な用語が造語されやすくなったと考えられる。

このような現代的な「環境」の用法に至る前段階として、「環境」への社会的関心が高まった時代が、1960年前後から始まる。「環境」が社会問題としてニュースとなったこの時代に、ある翻訳書が日本で出版されている。1冊の翻訳書の存在を次に取り上げておきたい。

(2) 「環境」への問題意識の萌芽

日本での「公害の原点」とされる水俣病が公式認定されたのは1956年である。じつに不幸なことではあったが、公害問題を契機として、このころから世間の関心は「環境」へと向けられた。ただし、当時の公害問題は局地的な環境破壊というとらえ方であり、地球温暖化で代表されるようなグローバルな視座ではなかった。とはいえ、高度経済成長がもたらした負の遺産として、大量生産・大量消費を是とする企業活動と環境破壊との関係が浮上り、それらは忘れられた部分と未解決の問題を残しながらも現代に至っている。

日本で公害問題が大きなニュースとなった60年代に、もうひとつの警鐘がアメリカ人女性によって鳴らされていた。レイチェル・カーソン (Rachel Carson) が *Silent Spring* を世に問うたのが1962年である。そして、その邦訳が2年後に日本で出版されている。この翻訳書は、1964年に刊行された青樹築一訳『生と死の妙薬』である。その後、文庫本としてタイトルが『沈黙の春』と改題され、40年以上を経た現代に至ってもロングセラーを続けている。一般的にいえば、翻訳書が話題となるのはたいてい誤訳か悪訳の場合であり、文学作品では著名な作家が訳した名訳が評判になることもあるが、それ以外の分野で「良訳」

が評価されることはほとんどない⁹。ただし「良訳」の定義をすることが本稿の目的ではないので、ここでは暫定的に、歴史や社会を変えるほどの影響力を持ちえた翻訳書の魅力を「良訳」の属性とする。『沈黙の春』の場合、原著の内容が衝撃的だと話題にされることはあっても、良質の翻訳書として日本社会に与えた影響について論じられることはこれまででなかったと思われる。そこで当時の学術的な一般書の翻訳規範も考慮しながら、この翻訳書であったからこそ読者の心をゆさぶることができ、社会への警鐘となったのだという点について指摘していくことにする。「環境」という言葉が日本社会で新たな意味を帯び始めた契機として良質の翻訳書があったのである。

まず、原著の内容そのものもその後の環境運動にとっていかに重要であったのかを見ておこう。1994年版にはアル・ゴア元副大統領が序文を寄せているが、その冒頭は次のように始まる。

Writing about *Silent Spring* is a humbling experience for an elected official, because Rachel Carson's landmark book offers undeniable proof that the power of an idea can be far greater than the power of politicians. In 1962, when *Silent Spring* was first published, "environment" was not even an entry in the vocabulary of public policy. Without this book, the environmental movement might have been long delayed or never have developed at all. (Carson, 1964, p. xv)

元副大統領に「政治家として屈辱的」とまで言わしめたカーソンの *Silent Spring* の初版が出された1960年代初期、アメリカでも環境問題はまだ政治課題ではなく、彼女の慧眼は政治家の権力を凌駕していたのだ。これほど影響力を持った書物が、2年後に邦訳されている。農薬の害や産業公害という社会問題が広く認知されようとしていた時代だが、当時はまだ、もともと生物学からの用語であった *environment* = 「環境」という言葉が、現在ほどには社会全体のキーワードとして耳目を集めていなかったはずである。この言葉が現在のように鍵概念として重みを持つようになった一助として、*Silent Spring* と『沈黙の春』の存在意義は大きい。しかも、この翻訳書では、当時の類書の多くが規範としていたような、原文の表層構造に忠実であろうとする翻訳方略が取られていない。そのような方略とは対極で、読者へとゆさぶりをかける訳なのである。青樹訳はカーソンの書いた英語を日本語で置き換えるだけの訳出ではない。学術書の翻訳にありがちな一語一句の「正確性」という陥穽にはまっていないのだ。カーソンの主張が日本語として生き生きと表現されて、

日本の読者に環境問題の切実さを訴えかけたのである。

The history of life on earth has been a history of interaction between living things and their surroundings. To a large extent, the physical form and the habits of the earth's vegetation and its animal life have been molded by the environment. Considering the whole span of earthly time, the opposite effect, in which life actually modifies its surroundings, has been relatively slight. Only within the moment of time represented by the present century has one species – man – acquired significant power to alter the nature of his world. (Carson, 1994, p. 5)

この地上に生命が誕生して以来、生命と環境という二つのものが、たがいに力を及ぼしあいながら、生命の歴史を織りなしてきた。といっても、たいてい環境のほうが、植物、動物の形態や習性をつくりあげてきた。地球が誕生してから過ぎ去った時の流れを見渡しても、生物が環境を変えるという逆の力は、ごく小さなものにすぎない。だが、二十世紀というわずかのあいだに、人間という一族が、おそるべき力を手に入れて、自然を変えようとしている。(青樹, 1974, p. 15)

一読しただけでも、日本語訳の方がまるで起点言語であるかのような錯覚を覚える翻訳である。このような完成度の高い日本語の翻訳となっている理由は、さまざまな点から指摘できよう。語彙レベルだけでなく、テキスト形成の結束性の点からも、単なる言葉の置き換えという翻訳方略が取られていない。これは原文と訳文を読み比べると明らかである。意味内容の的確な解釈を経た後、論理展開上のテキストの結束性を翻訳する際に日本語の接続詞が明示化されている。また、この短い段落で、*surrounding* が 2 回、*environment* が 1 回使用されているが、すべて「環境」と訳出されている。「環境」を力強く前景化した翻訳である。一般的に文体論の観点からは、日本語では英語ほど同じ語句の繰り返しが嫌われないとはされるが、ここでの指摘はそのような点ではない。引用した箇所とは別のところでもそうなのだが、「生命」と「環境」を明確に対照させることで、原著の意図を余すところなく鮮やかに再現している。

この翻訳書『沈黙の春』をとおして、カーソンの鳴らした警鐘が一般の日本人にも大きな衝撃を与えた。「環境」を社会問題として認識する時代の到来である。日本社会において、専門家のみではなく世間的にも環境問題が広く認知された背景に、「翻訳の賞味期限」¹⁰とは無縁の良質の翻訳書（2007年現在、1974年初版の文庫本は改版を経て70刷）が存在

していたといえる。この後の現実は何れのとおりだが、日本では1971年に環境省の前身である環境庁が発足し、政治課題として環境問題が本格的に取り組まれるようになる。アメリカでは、国家環境政策法（NEPA）が1969年に連邦議会で可決され、環境保護への動きが加速した。そんな「環境」の時代の幕開けに、*Silent Spring* と『沈黙の春』が出版されていたのは偶然ではない。

こうして「環境」という言葉の現代的用法が市民権を得たが、やがてこの言葉は増殖を始める。翻訳漢語として出発した生物学用語の「環境」が、社会問題を語る日本語として定着し、さらに名詞化された<モノ>としての造語能力を発揮していくのである。

(3) 「環境」を含む言葉の増殖

新聞や雑誌などのマスコミに登場する「環境」を含む用語は、たとえば「環境都市」「環境教育・環境学習」「環境アセスメント」「環境コスト」「環境コミュニケーション」「環境リテラシー」「環境ホルモン」など枚挙にいとまがない。「自然環境」「社会環境」「家庭環境」などというように、「環境」を後置する従来の用法から、「環境+名詞」という順序で「環境」を前置する複合型が増えているのが印象的だ。いわゆる伝統的な組合せである「名詞+環境」型では、主体を取り巻くさまざまな境遇をあらわしていた。他方、「環境+名詞」型の特徴は、「環境」そのものが重要な主題として注目されている点にある。しかし、ここで同時に考えなくてはならないのは、名詞と名詞が結合すると、その結合関係により多様な意味の可能性が生まれ、意味関係の曖昧性という名詞化の文法的比喩の特質が加わることである。とくに後者の組合せの場合に顕著であるが、背景知識を欠く者にとっては近づきにくい専門用語となる傾向がある。また「環境+カタカナ語」が多数あるのも特徴的で、独特のわかりづらさが生じている。カタカナ語の特質として鳥飼（2007, p. 58）が指摘するのは、「異質性と斬新な響きを併せ持つ語感」や「専門性」「ぼかし効果」である。これらは文法的比喩としての名詞化の特性とも重なる。さらに、「環境」という漢語からの借用語（loanword）とカタカナ語という西洋語からの借用語との奇妙な親和性が、これらの特質を倍加させ、2種類の外来語から合成された複合名詞が、抽象度の高い<モノ>を形成し複雑な文法的比喩となる。

たとえば「環境アセスメント」という複合名詞の曖昧さは、「アセスメント」というカタカナ語の理解に至るまでの距離感に加えて、次の2通りの意味解釈の可能性を残すことが原因であると考えられる。すなわち、「環境」に与える影響を評価すること、「環境」が与え

る影響を評価すること、の2通りである。同時に、前者の場合は何が影響を与えるのか、後者の場合は何に影響を与えるのかがそれぞれ明示的でない。このような曖昧性は、専門用語のわかりにくさにもつながり、一般人と専門家を隔てる壁にもなる。ちなみに、実際の意味内容として『日本大百科全書』では、「環境アセスメント」を次のように説明している。

環境に影響を与える計画や事業その他の行為に際し、環境の現況を評価し（環境評価）、次いで各種の代替案を考えて、その環境への影響を評価して（環境影響評価）、最良の案を選択し、さらにその実施段階で、予測・評価どおりになっているかどうかを監視し、そうでない場合には見直し、是正するという各段階からなる手続の総体をいう。（1985, p. 130）

これだけの意味を内包したものを「環境アセスメント」という言葉に凝縮して提示するのが、名詞化された文法的比喩の特徴である。ここに書かれた知識を持っている場合に、はじめてこの言葉を理解できるのだが、そうでない場合には、言葉に意味が伴わない、内容のない単なる記号となってしまう。これは柳父の提唱する「カセット効果」にも共通する特徴である。ただし、柳父はこのような特徴を言葉の病理現象として否定的に論ずるのではなく、まともな生理現象として正面から扱う。「ことばじたいの魅力とも言うべき効果」として、積極的な価値を主張するのである。「ことばは、生まれはじめには意味は乏しい。意味は乏しくても、ことばじしんが人々を惹きつける。だから使われ、やがて豊かな意味をもつようになるのだ」と柳父（1976/2003, pp. 1-63）は指摘する。

(4) 「カセット効果」

柳父（1976/2003, 1982）は翻訳語の成立の歴史について論じながら、翻訳語を「文化的な事件の要素という側面」からとらえる。「社会・近代・美・恋愛・存在」など翻訳のための新造語や「自然・権利・自由・彼」など既存の日本語と同時に翻訳語としての新しい意味が複合的に交じり合った言葉について考察を行う。そして、新しい翻訳語の向こうに、新しい意味があるという約束を「カセット効果」（カセットとはフランス語で宝石箱を意味する *cassette* に由来）としてこう説明する。

小さな宝石箱がある。中に宝石を入れることができる。どんな宝石でも入れることができる。が、で

きたばかりの宝石箱には、まだ何も入っていない。しかし、宝石箱は、外から見ると、それだけできれいで、魅力がある。その上に、何か入っていそうだ、きっとはいっているだろう、という気持ちが、見る者を惹きつける。新しく造られたばかりのことばは、このカセットに似ている。(柳父, 1976/2003, pp. 24-25)

翻訳語の意味の曖昧性やそれを一知半解の知識で使うことの危うさだけでなく、「カセット効果」では、「意味が欠けていることば、意味が不十分なことばのもつ効果」を意味ある効果としてとらえる。ここで「環境」という言葉について考えれば、それはもともと漢籍にあった語を *environment* の訳語として使用するようになった翻訳語であり、複合化しながら現代社会で最も注目される新しい言葉の数々を生み出し続けている。多くの場合が名詞である翻訳語における意味の混在という「カセット効果」という考え方は、文法的比喩として名詞化された「環境」という言葉の分析にも有効であり、本稿での論点と相互補完的に翻訳語への視点を豊かにするものである。

4. おわりに

最後に、最も現代的な用例として「環境」のもうひとつの意味を補足しておきたい。『大辞林』〔第3版〕(2006, p. 552)での「環境」の説明には「③動作中のコンピューターの状態。ハードウェア、ソフトウェア、ネットワークにより限定される」と書かれている。IT時代の到来でコンピューターでの「環境」も出現した。ここでは「次世代 OS 環境」などというバーチャルな空間をめぐる「環境」という言葉が増殖している。さらに「環境音楽」「環境映像」も自然環境を擬似的に都市に再現したという点では、バーチャルな「環境」を意味しているといえるだろう。「環境」とは本来、生物を取り巻く身近な空間であった。そこには具体的なくコト>が出来事として躍動しているはずである。それが一方でマクロなボーダーレスの地球規模へと拡大し、他方でミクロのバーチャルな世界へとつながって抽象的なくモノ>となったのが、現代の「環境」という言葉をめぐる「メタ環境」である。

このような空間的広がりや、「環境」を社会問題として考える際にも影響してくる。自分とは直接関係のない遠い世界の出来事として、他人事のような感覚で、あるいは自分ひとりではどうすることもできない難問として、環境問題をとらえる傾向がないだろうか。名詞化という文法的比喩が抽象度を高め、複合化されて意味のわかりづらくなった「環境」という言葉の肥大化。だが、自分を取り巻く身近で具体的なくコト>として、言葉のルーツ

を再認識すれば、環境問題をみずからの問題としてとらえ直すことに一歩近づくはずである。「環境」の字義の原点を思い描くことも無駄にはならない、と筆者は考える。三浦(2007)は古い時代の日本の言葉で、現代の日常を言いかえる試みをしているが、これは単に言葉の問題だけではなく、もう一度その言葉の意味を考えることにもつながるであろう。『現古辞典』(三浦, 2007)から「環境」の項を以下に引用する。

①めぐり。「愚かにそ我は思ひしをふの浦の荒磯のめぐり見れど飽かずけり」(万葉四〇四九) ②くにがた(国形)。「国忍別命、詔りたまひしく、『吾が敷き坐す地は、国形宜し』」(出雲国風土記・島根郡)

「環境」という翻訳語がなかった頃のいにしへの日本人は、みずからを取り巻く空間を「めぐり」や「くにがた」として慈しんでいた。ちなみに古代ギリシアでは紀元前にピポクラテスが、病気の発生と「空気、水、場所」という具体的要素の影響について、「環境」という抽象語を用いずに論じている。また、阿部とエバノフ(1995)は思想としての「環境」について、人類史の観点から概観し、先史時代にまで及んでいる。

人類の最も初期の祖先は次第に、将来の新たな可能性を想像し、いかに生きるかを意識的に選択する能力が彼らにあることを認識するようになった。本能は後退し、適応は相互的な問題となり得るとの自覚が増大した。つまり人間はあらゆる生物と同様、環境に適応する必要がある一方で、ニーズや欲望を満足させるために環境をある程度変えることが可能であるとも認識した。(1995, p. 8)

「環境」という抽象概念の名詞として、<モノ>に凝縮される前から、その言葉が内包する意味内容への思いや認識は、人類とともに長い歴史を歩んできたのだ。本稿では翻訳語という観点から「環境」という言葉の歴史をたどり、名詞化された文法的比喩として論じてきた。現代社会のキーワードとして頻繁に接しながらも、またそれゆえに、輪郭が見えにくくなっている「環境」。その言葉の翻訳語としてのルーツを確認し、<モノ>としての名詞化の特徴を顕在化させることは、自己をめぐるダイナミックな出来事としてわれわれを取り巻く「環境」を再考する契機ともなるのではないか。

註

- 1 「自然と人間」に代表される西洋近代の二元論への異議申し立てとして、「環境」を社会学的または思想史的視点から考察する（たとえば、三浦, 2006; Nash, 1989; 田中, 1998 など）のも興味深いが、本学異文化コミュニケーション研究科で扱う領域を横断する可能性のひとつとして、本稿は「環境」と「翻訳」をキーワードとする言語学的論考を限られた範囲内で試みるものである。
- 2 池上（2003, 2004, 2006）は、<コト>と<モノ>との対比を話者の「事態把握（construal）」のしかたの相違として指摘する。そして<コト>的な認識を「主観的把握（subjective construal）」として、日本語話者に好まれるいくつかの言い回しと関連付けている。このように認知言語学的観点からは、「文法的比喩」を「客観的把握（objective construal）」のひとつの方法として捉えることもできるであろう。
- 3 科学技術などの専門書における文法的比喩について詳説した文献としては、たとえば Lassen 2003; Simon-Vandenberg et al. 2003 などを参照。ちなみに安井（2007, p. 14）は「日本語式」文法的比喩として「漢語表現」の頻出する学術論文や科学論文のジャンルでは「知的な負担量」が増えると指摘する。
- 4 ドイツの生物学者、ヤーコプ・フォン・ユクスキュル（1864-1944）は生物が主体として意味を与えて構築した世界をドイツ語で *umwelt* としているが、これは客観的な「環境」*umgebung* とは区別されて「環境世界」「環世界」と日本語に訳出されている（ユクスキュル・クリサート, 2005）。
- 5 11世紀の中国ですでに「環境」という言葉が使用されている。最古の使用例は唐代の歴史を書いた『新唐書』であり、「中国北宋王朝の歴史家の欧陽脩（1007-72）は1060年に完成した唐代の正史『新唐書』のなかでまわりという意味として環境いう語を使っている」（吉山, 2002, p. 114）。ただし本稿では、最古の事例を特定することが重要なのではなく、漢籍に使用例があることが認められるだけで十分であるので、日本での一般的な辞書の説明を引用した。
- 6 高野（2004）は、『哲學字彙』の訳語のなかで現代では消滅したものを「すべての辞書から消滅した語基」として分類している。「環象」もそのうちのひとつで、次のように説明されている。「現代語では環境と訳される。初版・再版とも同じで生物学用語とし、3版では境遇を加えている。環境は、漢籍を典拠とし周囲の境界を原義としている。日本語で、今日の意味で使われるようになるのは大正期に入ってからであろう」（高野, 2004, p. 87）。しかし、「環象」という言葉は、現在でもいくつかの辞書には登場する（実際の使用頻度は別問題であるが）。たとえば『広辞苑』[第5版]（1998/2002）には「周囲をとりまいて一切の現象。個人をとりまく社会現象の類」とある。また『日本国語大辞典』[第2版]（2001, p. 1294）にも「周囲を取り巻き、影響を与える、すべての現象」と説明さ

れている。

- 7 英語の *environment* は、トーマス・カーライル (1795-1881) がドイツ語 *umgebung* に対し、フランス語 *environ* の語尾に *ment* をつけて造語したとされる (吉山, 2002, p. 114)。カーライルはイギリスの評論家・歴史家であり、ゲーテを翻訳し、サン・シモン、J.S. ミルらと親交があった。また、フランス語の *environnement* の初期の使用例としては、『哲学・思想翻訳語事典』(2003) が、コント (1798-1857)、ラマルク (1744-1829)、ベルナール (1813-1878) らを挙げて説明している。
- 8 「環境」という言葉の日本における初出例は、『日本国語大辞典』〔第 2 版〕にも引用されているように、市川源三解説『パーカー氏統合教授之學理』(1900) での一節である。
- 9 誤訳・悪訳の話題は豊富であり、代表的な批評としては、別宮貞徳が 1978 年から 98 年にかけて 20 年間、月刊誌『翻訳の世界』に「欠陥翻訳時評」を掲載した。別宮 (1985) では、1978 年から 1984 年までに取り上げた翻訳書 56 冊のうち、自然科学分野 16 冊、社会科学分野 15 冊、文学を除いた人文科学分野 14 冊などを総括して論じているが、「専門家が書いた一般向き啓蒙書」の翻訳に日本語表現上の悪訳が多いことを指摘している。
- 10 村上と柴田 (2000, p. 81) が「翻訳の賞味期限」という表現を用いて以来、この言葉は多用されている。だが、時代を変えた良訳を論ずるためには流行語に惑わされない視点が必要である。ある時代における翻訳規範 (*translational norm*) が無差別に「翻訳の賞味期限」を付けるわけではない。

[参考文献]

- 阿部治・エバノフ, R. (1995). 「人類史と環境思想」 尾原秀雄 (監修) 『環境思想の出現』(8-31 頁). 東海大学出版会.
- 別宮貞徳 (1985). 『翻訳と批評』講談社.
- Carson, R. (1962/1994). *Silent Spring*. New York: Houghton Mifflin [青樹築一 訳 (1964/2006). 『沈黙の春』新潮社].
- Eggs, S. (1994). *An Introduction to Systemic Functional Linguistics*. London: Pinter.
- Halliday, M. A. K. (1994). *An Introduction to Functional Grammar, second edition*. London: Edward Arnold.
- Halliday, M. A. K. & Matthiessen, C.M.I.M. (2004). *An Introduction to Functional Grammar, third edition*. London: Edward Arnold.
- 平凡社 (編) (2006). 『世界大百科事典』〔改訂版〕平凡社.
- 池上嘉彦 (2003, 2004). 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の指標 (1) - (2)」『認知言語学論考』 No.3.

- (1-49 頁)、No.4. (1-60 頁).
- (2006). 「<主観的把握>とは何か」『月間言語』Vol.35. No.5. (20-27 頁). 大修館書店.
- 井上哲次郎 (編) (1884). 『哲学字彙』東洋館.
- 石塚正英・柴田隆行 (監修) (2003). 『哲学・思想翻訳語事典』論創社.
- Lassen, I. (2003). *Accessibility and Acceptability in Technical Manuals*, Amsterdam: John Benjamins.
- 松村明 (編) (2006). 『大辞林』〔第 3 版〕三省堂.
- Martin, J. R. (1992). *English Text*. Amsterdam: John Benjamins.
- 三浦永光 (2006). 『環境思想と社会：思想史的アプローチ』御茶の水書房.
- 三浦佑之 (2007). 『現古辞典』2007 年 8 月 27 日 <http://homepage1.nifty.com/miuras-tiger/genko.html> より情報取得.
- 森岡健二 (1991). 『近代語の成立：語彙編』明治書院.
- 村上春樹・柴田元幸 (2000). 『翻訳夜話』文藝春秋.
- Nash, R. F. (1989). *The Right of Nature: A History of Environmental Ethics*, Seattle: The University of Washington Press.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (編) (2001). 『日本国語大辞典』〔第 2 版〕小学館.
- 新村出 (編) (1998/2002). 『広辞苑』〔第 5 版〕岩波書店.
- 齋藤秀三郎 (1922/1982). 『齋藤英和辞典』名著普及会.
- 佐藤喜代治他 (編) (1996). 『漢字百科大事典』明治書院.
- 小学館 (編) (1985). 『日本大百科全書』小学館.
- Simon-Vandenberg, A. et al. (Eds.) (2003). *Grammatical Metaphor*, Amsterdam: John Benjamins.
- 杉本つとむ (1981). 『江戸時代翻訳日本語辞典』早稲田大学出版部.
- 高野繁男 (2004). 『近代漢語の研究』明治書院.
- 田中宏 (1998). 『社会と環境の理論：社会・環境関係の構造と動態』新曜社.
- 鳥飼玖美子 (2007). 「カタカナ語に見る意味のずれ」『月間言語』Vol.36, No.6. (52-59 頁). 大修館書店.
- ユクスキュル, J.・クリスサート, G. (2005). 『生物から見た世界』(日高敏隆・羽田節子 訳) 岩波書店. [原著: Uexkull, J. von & Kriszat, G. (1934/1970). *Streifzuge durch die Umwelten von Tieren und Menschen*].
- 柳父章 (1976/2003). 『翻訳とはなにか：日本語と翻訳文化』法政大学出版局.
- (1982). 『翻訳語成立事情』岩波書店.
- 安井稔 (2007). 「文法的メタファー事始め」『機能言語学研究』第 4 卷. (1-20 頁). 日本機能言語学会.
- 吉山青翔 (2002). 「環境思想論の基本的構造」植田栄二・武本行正・小川東 (編) 『環境学総論』(113-127

頁). 同文館出版.